

Ⅱ 子どもの自然体験参加や親のしつけを促す要因～保護者調査の結果から～

青森大学 社会学部 教授 柏谷 至

1 はじめに

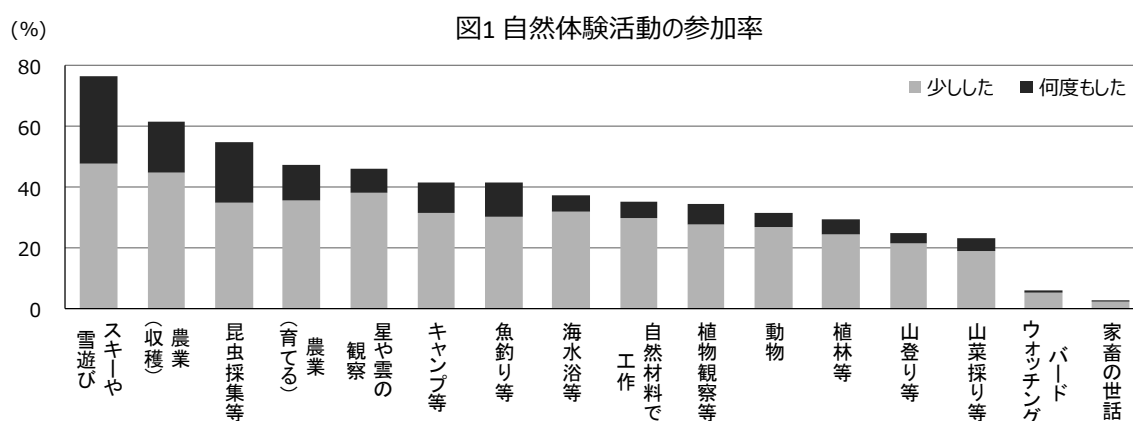
本節では、「青少年の体験活動に関する県民の実態調査」のうち、県内の小学校2・4・6年生の保護者を対象とする質問紙調査（以下、「保護者調査」）の結果から、子どもの自然体験活動への参加やしつけに対する親の行動や態度を測定し、それに影響を与えている要因について考察する。

本報告書でこれまで触れてきたとおり、子どもの自己肯定感や道徳観・正義感、自立的行動習慣の形成には、子どもたちの「体験」が大きな影響を与えている。また先行する調査では、保護者がしつけに力を入れている家庭ほど、子どもの自己肯定感や道徳観・正義感等が高くなると指摘されている¹。

それでは、子どもたちを体験活動に参加させたり、子どもたちへのしつけを積極的に行ったりする保護者側の要因とは何だろうか。体験活動への参加や家庭でのしつけを充実させるためには、どのような方策が有効だろうか。本節では、保護者調査の回答項目の分析を通じて、こうした課題への接近を試みる。

2 自然体験活動への参加

保護者調査では問6で、平成30年4月から回答時点までの約1年間に子どもの自然体験活動に参加したか否かを尋ねている。図1は、16の活動種類別に参加率（「何度もした」「少しした」を合計した割合）の高い順に並べたものである。



各項目の相関は高く、ある活動に子どもたちを積極的に参加させている親は、別の活動にも積極的な傾向がある。この16項目に対して因子分析²を行ったところ、魚釣

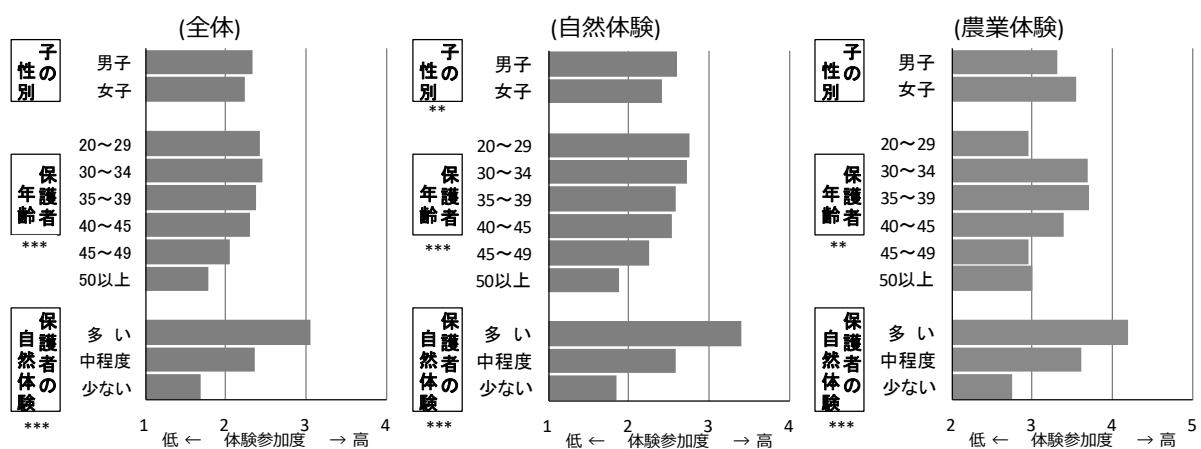
¹ 国立青少年教育振興機構「子どもの自己肯定感や道徳心は保護者の関わり次第で大きく変わる!～『青少年の体験活動等に関する実態調査(平成26年度調査)』結果の概要～」2016年5月2日付プレスリリース(2018年1月29日改訂)。国立青少年教育振興機構Webサイトより。

² 因子分析は、複数の回答項目に共通した潜在変数を仮定し、項目間の関連性を明らかにする統計分析手法である。今回の分析では因子抽出には主因子法を、軸の回転にはプロマックス回転を用いた。

りや昆虫採集、海や川で泳ぐなど、狭い意味での「自然体験活動への参加」と、米・野菜・果物を育てたり収穫したりする「農業体験への参加」という2つの因子が抽出された。そこで、自然体験活動への参加度を「自然体験」「農業体験」および項目全体の3種類について尺度化した³。それぞれの尺度は、数値が大きければ、保護者が自分の子どもを自然体験活動に積極的に参加させていることを、小さければ自然体験活動への参加に消極的であることを示している。

自然体験活動への参加は、どのような要因に影響を受けているのだろうか。まず、保護者や子どもの属性ごとに回答者をグループ化し、自然体験活動への参加度の平均値を比較した結果を図2に示す⁴。狭義の自然体験では男子を女子よりも積極的に参加させていること、保護者が若いと参加度が高く、年齢が高くなるにつれて参加度が低くなることが分かる。

図2 保護者・子どもの属性と自然体験活動参加



また、保護者自身の普段の自然体験（問12-1）を同様に尺度化⁵し、子どもの自然体験参加度との関連を見ると、日常生活の中で自然に触れている保護者のグループほど、自分の子どもにも積極的に自然体験をさせていることが見て取れる。親自身が体験活動に関心を持ち、子どもと一緒に体験することの大切さを示唆しているデータである。

次に図3では、世帯収入（問14）や教育費（問13 学校以外の教育にかける1ヶ月の平均支出）と自然体験活動への参加度との関連を示した。いずれの指標についても、世帯収入が高い層・教育費支出が大きい層ほど自然体験活動への参加度が高く、収入

³ 尺度は、各項目の回答を「何度もした」=2点、「少しした」=1点、「しなかった」=0点として合計した後、合計点を10点満点に換算して作成した。各尺度に対応する回答項目、および尺度を構成する項目の一貫性を表す信頼性係数（クロンバックの α ）は以下の通り。

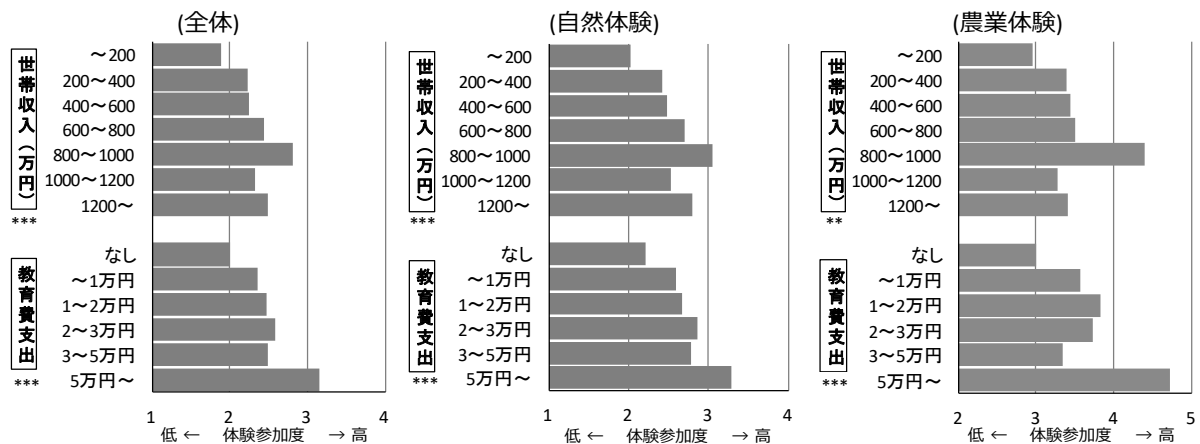
- ・全体…全項目（16項目、 $\alpha = 0.822$ ）
- ・自然体験…a 山登りなど、b 海や川で泳ぐなど、c 動物とふれあう、d キャンプ、e スキーや雪遊び、f 昆虫採集など、g 植物・岩石の観察、i 星や雲の観察、j 山菜などの採取、k 魚釣りなど、l 自然の材料で工作（11項目、 $\alpha = 0.777$ ）
- ・農業体験…n 米や野菜を植えたり育てたりする、m 米や野菜や果物などを収穫する（2項目、 $\alpha = 0.848$ ）

⁴ これ以降、平均値の差は一元配置の分散分析を用いて統計的検定を行っている。図では、有意水準5%で差が認められるときには「*」、1%のとき「**」、0.1%のとき「***」を、項目名（枠で囲んだ部分）の下に表示した。

⁵ 尺度には問12-1の9項目すべてを用い、各項目の回答を「何度もある」=2点、「少しある」=1点、「ほとんどない」=0点として合計した後、合計点を10点満点に換算して作成した。信頼性係数（クロンバックの α ）は0.864となった。

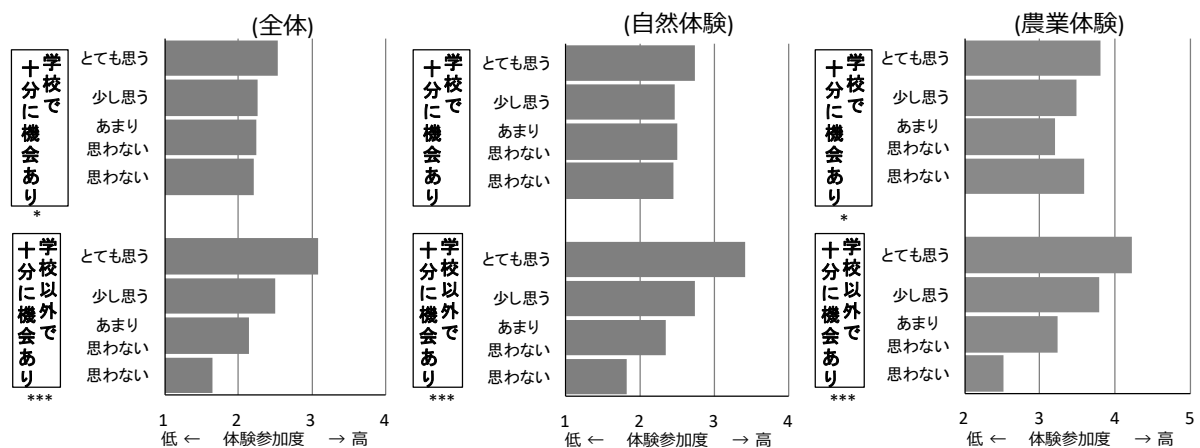
が低い・教育費支出が小さい層ほど参加度が低くなっている。自然体験活動への参加はその費用の支払い能力によって決まっていると見てよいのだろうか。この論点については、のちほど「考察」で議論したい。

図3 世帯収入・教育費支出と自然体験活動参加



最後に、子どもの体験活動についての意見に関する質問（問 9）から、体験機会の十分さについての評価と自然体験活動への参加度との関連を見てみよう（図 4）。学校以外の場で体験の機会が十分にあると評価している人ほど、子どもを自然体験活動に積極的に参加させていることが分かる。

図4 体験機会の評価と自然体験活動参加



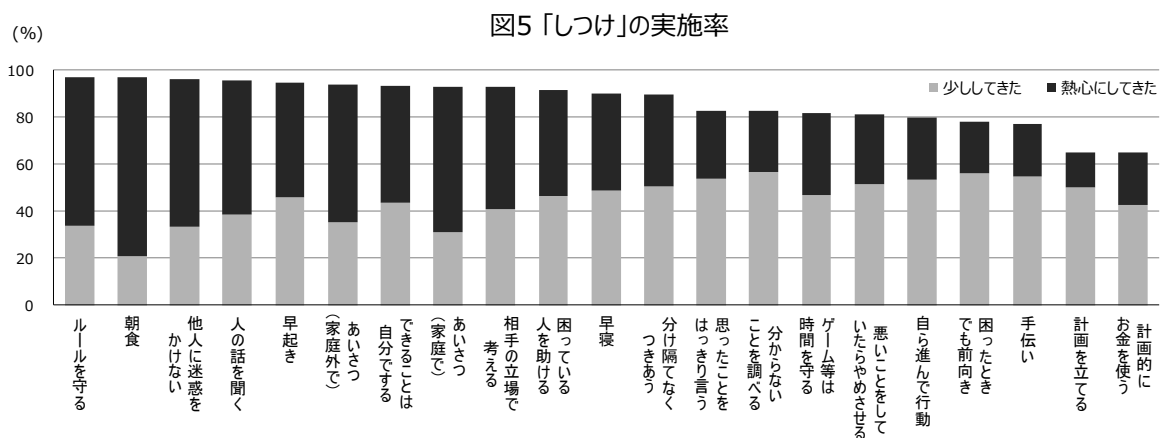
3 しつけ

子どものしつけについては、保護者調査の問 10 で、21 種類の行動・習慣をどのくらい身に付けさせようとしてきたかを問うている。各項目の「熱心にしてきた」「少ししてきた」という回答の割合を図 5 に示す。これら 21 項目についても因子分析を行った結果、次に挙げる 4 つの因子が抽出された。

- ・第 1 因子…「相手の立場になって考える」「ルールを守って行動する」「人の話をきちんと聞く」など、他者との「協調」に関するしつけと解釈できる因子

- ・第2因子…「先のことを考えて計画を立てる」「困った時でも前向きに取り組む」「人から言われなくても進んで行動する」など、行動の「自律性」に関するしつけと解釈できる因子
- ・第3因子…「夜更かしをしないで早く寝る」「起きなければいけない時間に起きる」「毎朝朝食をたべる」など、「規則的生活習慣」に関するしつけと解釈できる因子
- ・第4因子…「家で」および「近所の人や知り合いの人」に対する、「あいさつ」に関するしつけと解釈できる因子

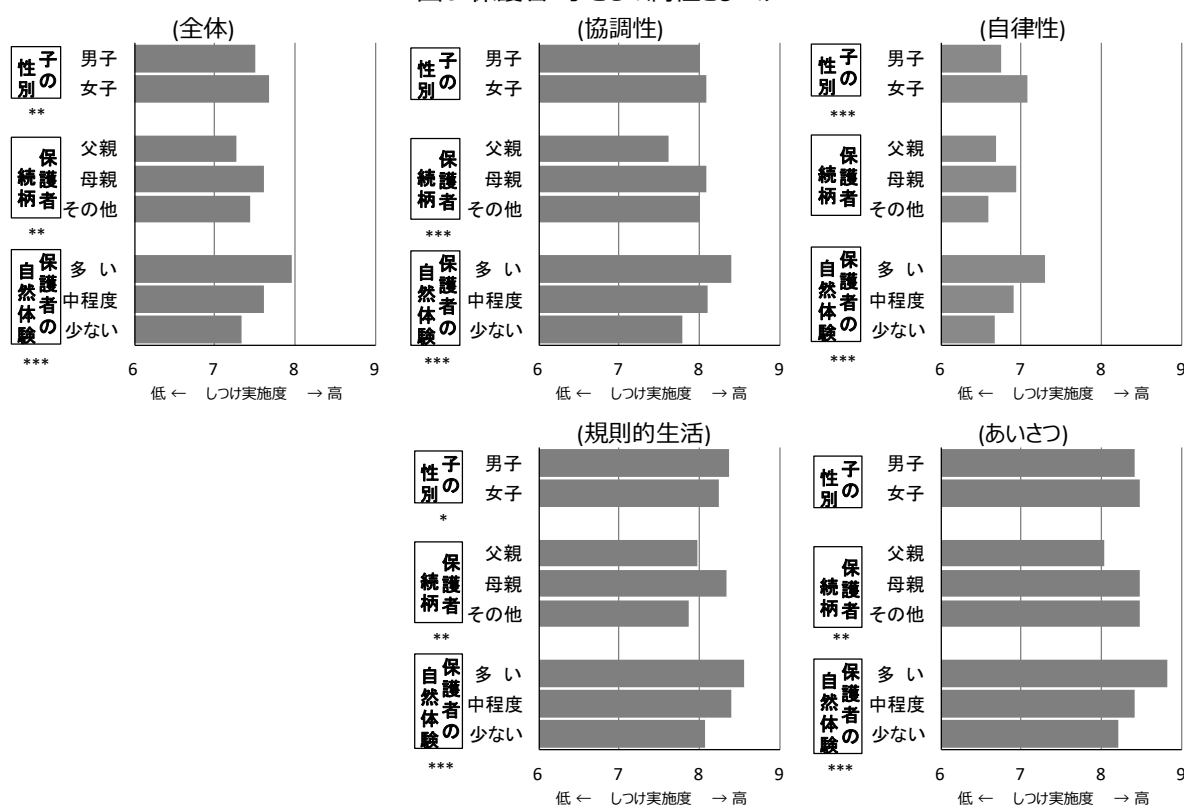
そこで「しつけ」の実施度については、しつけ「全体」および「協調性」「自律性」「規則的生活習慣」「あいさつ」の下位尺度を作成した⁶。それぞれの尺度は、数値が大きければ保護者がその分野のしつけを熱心に行ったことを、小さければあまり行わなかったことを示している。



⁶ 尺度は、各項目の回答を「熱心にしてきた」=3点、「少ししてきた」=2点、「あまりしてこなかった」=1点、「全くしてこなかった」=0点として合計した後、合計点を10点満点に換算して作成した。各尺度に対応する回答項目および信頼性係数(クロンバックの α)は以下の通り。

- ・全体…b 起きなければならない時間に起きる、d 手伝いをする、f 家であいさつをする、g 近所・知り合いの人にあいさつをする、h ゲーム等は時間を守って遊ぶ、i 思ったことをはっきり言う、j 他人に迷惑をかけずに行動する、k できることは自分でする、l 分からないことを調べる、m 先のことを考えて計画を立てる、n 困った時でも前向きに取り組む、o 人から言われなくても進んで行動する、p 分け隔てなくつきあう、q 人の話をきちんと聞く、r 困っている人を助ける、s 相手の立場で考える、t ルールを守る、u 悪いことをしていたらやめさせる (18項目、 $\alpha=0.898$)
- ・協調性…j 他人に迷惑をかけずに行動する、p 分け隔てなくつきあう、q 人の話をきちんと聞く、r 困っている人を助ける、s 相手の立場で考える、t ルールを守る、u 悪いことをしていたらやめさせる (7項目、 $\alpha=0.864$)
- ・自律性…i 思ったことをはっきり言う、k できることは自分でする、l 分からないことを調べる、m 先のことを考えて計画を立てる、n 困った時でも前向きに取り組む、o 人から言われなくても進んで行動する (6項目、 $\alpha=0.835$)
- ・規則的生活習慣…a 早く寝る、b 起きなければならない時間に起きる、c 毎朝朝食を食べる (3項目、 $\alpha=0.697$)
- ・あいさつ…f 家であいさつをする、g 近所・知り合いの人にあいさつをする (2項目、 $\alpha=0.662$)

図6 保護者・子どもの属性としつけ



保護者や子どもの属性としつけ実施度との関係を図6に示す。子どもの性別で比較すると、男子よりも女子に対してしつけ全体や自律性に関するしつけが積極的に行われている一方、規則的生活に関するしつけは男子に対しての方が、より積極的に行われている。保護者の続柄別では、回答者の母親の場合には、父親やその他（年齢から見て多くは祖父母と思われる）よりも積極的にしつけに関わっている。また、自然体験活動の場合と同様に、保護者自身の自然体験が多いほど、子どものしつけに積極的であることもわかる。他方、自然体験の場合には関連性が高かった保護者の年齢に関しては、統計的に有意な影響関係が見られなかった。

世帯収入や教育費支出との関連を見ると、世帯収入としつけとの間にはあまり明確な関係が見られないのに対し、教育費支出が多い層はしつけに積極的で、少ない層は消極的であるという傾向が見られる（図7）。また、体験機会の十分さについての評価としつけ実施度との関連（図8）については、学校・学校以外でも体験の機会が十分にあると考えている保護者ほどしつけに積極的であり、そうした機会が少ないと考えている保護者はしつけに消極的であるという結果が得られた。

図7 世帯収入・教育費支出としつけ

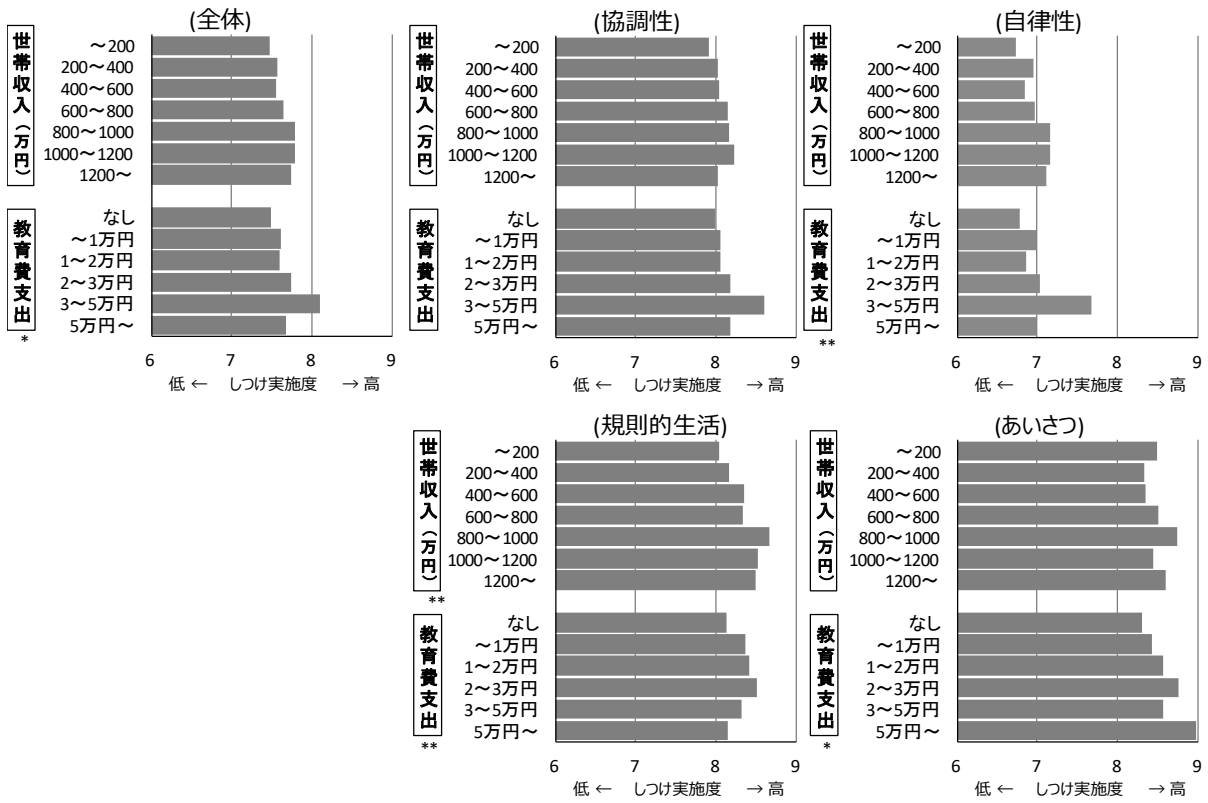
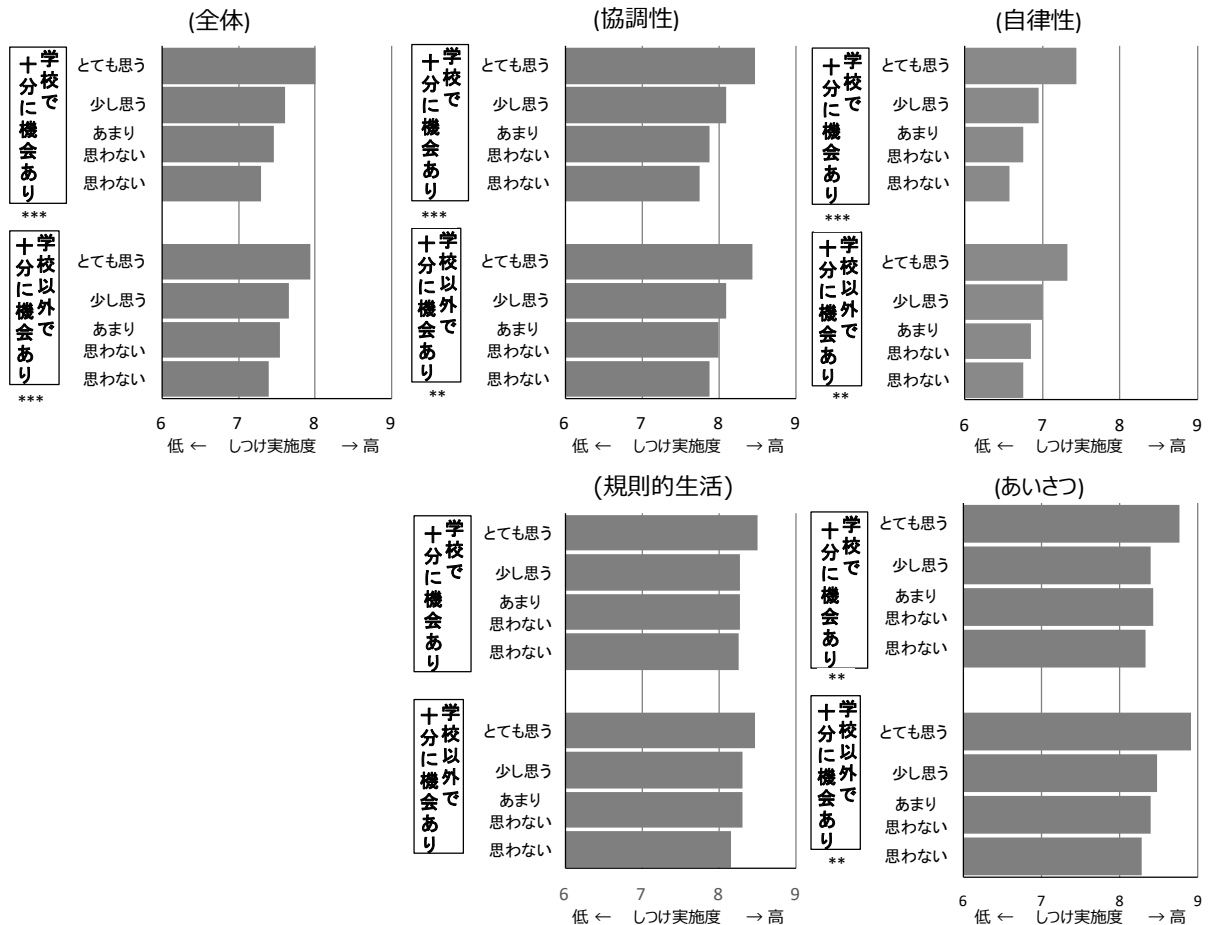


図8 体験機会の評価としつけ



4 考察

本節では、自然体験活動への参加やしつけに対する保護者の積極性を尺度化として測定し、それに影響を与えている要因について分析してきた。その結果、両者に共通して影響を与えている要因として、その家庭の「教育費支出」、「体験機会の十分さ」についての保護者の評価、そして「親自身の自然体験」が上げられたので、これらについて若干の考察を加えてみたい。

本調査の分析結果からは、世帯収入と教育費支出が自然体験活動への参加度やしつけの実施度に、(互いに関連はしつつも)異なる影響を与えていることが示された。先行する調査(脚注1参照)でも、世帯収入と子どもへのしつけの間にはほとんど関係がみられないのに対し、子どもの教育費が高い家庭ほど子どもへのしつけが多くなる傾向が指摘されている。

教育費支出は家庭の経済力を反映しているものと考えられがちだが、本調査の結果からは、教育費支出の多寡には保護者が教育や子育てに対して持っている態度や価値観が反映していると予想できる。親世代の経済格差が子ども世代の格差につながらないようにするためには⁷、親と子どもとの望ましい関わりを支援することが重要であると言える。

こうした視点から興味深いのは、体験機会の十分さについての保護者の評価が、自然体験活動への参加度としつけ実施度の両方に影響を与えているという調査結果である。同様に、保護者自身の日常的な自然体験の多さが、子どもの自然体験への積極性やしつけに対する態度にも反映していた。こうした評価や保護者の体験は、学校や地域社会の「教育力」に対する保護者の信頼感を反映しているのではないだろうか。子どもの子育てを担う保護者層への社会教育・生涯学習的な働きかけが、いっそう求められていると言えそうである。

⁷ こうした論点について国際比較調査の結果から検討したものとして、内田伸子 2017 「学力格差は幼児期から始まるか—経済格差を超える要因の検討」『教育社会学研究』100:108-119.